

## 親鸞聖人のお経塚

親鸞聖人は稲田に御在留のとき、一切経のあった鹿島神宮へ、よく教典をご覧になりに行かれたという。そのため稲田から鹿島へ続く街道筋には親鸞聖人のご旧跡が点在する。「田上の七不思議」や弁円の護摩壇跡「喜八阿弥陀」「爪かき阿弥陀」などがそれで、ここ「親鸞聖人お経塚」も石岡～高浜道沿いにあり、ご旧跡の中でも、特に知られていない一つで、その伝承の詳細を知る人はなかった。

今回、本浄寺様からお話を伺い、そして、石岡市教育委員会の安藤氏にご協力いただき、資料を探していただいたことで、埋もれていた伝承を掘り起こすことが出来た。

その昔、天気の良い日には、ここから富士山がよく見えたという。きっと、親鸞聖人も鹿島への道すがら、富士山を眺めながら足を止め休まれたことであろう。

今回、初めてその場所に訪れてみると、とても大きく立派な石碑が建っていた。また石碑中央前には『無量寿経』上巻末にある「諸仏、各各安立 無量衆生 於仏正道」の経文が彫られた巻物仕立ての經典に模した石碑が置かれている。また、石碑左手前の小さな石塔は「一字一石塔」と呼ばれ、聖人の当時に、お経塚の上に建てたものと伝えられる。

このお経塚について江戸時代後期に書かれた水戸藩領内の歴史書である『新編常陸国誌』に、次のような記録が残されている。

「府中経塚／新治郡府中の小目台と云う所にあり。本願寺上人(親鸞聖人)の小石に経文を彫りて埋めし所なりと云う。文化11年(1814)の春、二十四輩巡礼の者来りて経石を掘得て去る。其後近隣の農夫集まりて頻に掘出だしければ、梵字などのある石もありしと云う。其事領主に聞えて妄に掘ることを禁ぜられしとぞ、これに依て舊の如く塚に封ず」。



親鸞聖人お経塚

その後、1924年(大正13)のこと。静岡県にある専念寺のご住職が、本浄寺(茨城一組・石岡市)に伝えられている「袈裟掛名号」(参照)の伝説地を探していた。ちょうどその時、本浄寺のご門徒が畑から文字の書かれた小石がいくつも出てくるので、寺へ知らせていた。それを聞いた静岡の住職は、そこが「袈裟掛名号」の伝説地に違いないと、本浄寺の門徒の手を借り石の出たところを掘り起こした。すると、文字の刻まれた経石がザル七杯ほど出てきた。調べてみると小石には『無量寿経』にある文字が刻まれ、親鸞聖人の筆跡に違いないことがわかったと伝えられる。

その翌年のこと、道路拡張工事で、お経塚が道に重なるため、新道脇に移すことになり、本浄寺を中心に、ご門徒や県内外の真宗寺院、また近隣の人々や他宗寺院など、多くの協力を得て一新され、現在に至っている。

親鸞聖人が何故ここへ經典の文字を書いた小石(経石)を埋めたかについては「諸人の供養」としか伝えられていない。しかし、先に述べた静岡の住職が「袈裟掛名号」の伝説地と断定したことや、ここからほど近い「喜八阿弥陀のお経塚」を重ねて推測すると、斬り付けられた女性の供養のために、親鸞聖人が経石を埋めたという言い伝えが、以前



「一字一石塔」



本浄寺（石岡市）



『大経』下巻の経文が刻まれた石碑

は残っていたのかもしれない。

幽霊の供養というと、聖人の教えからかけ離れた話ではあるが、女性が仏法の教えに出会い、救われることなど考えられなかった時代に、聖人は男女のへだてなく、お念仏によって救われると人々に説かれたことは画期的なことであった。きっと、その教えに出会った人々は深く感動したことであろう。そうした親鸞聖人への尊敬と親しみが、時を経て数々の伝説を生み出したに違いない。

（参照）本浄寺の袈裟掛名号

親鸞聖人御在世の当時のこと。お経塚のあたりに一軒の百姓家があった。その家の嫁は、親鸞聖

人の教えに出あい、それから毎晩のように念仏講に出掛けていた。舅は、嫁が毎晩のように出掛けるため、外に男が出来たと誤解し、口論の末に刀で袈裟がけに斬りつけた。嫁はからくも命は取り止めたが、その傷がもとで死んでしまった。それからというもの、不吉なことが次々と起こるため、人びとは嫁のたたりではないかと恐れた。ある時、舅は、嫁が親鸞聖人からいただいた「南無不可思議光如来」のお掛け軸を開いたところ、名号が袈裟がけに斬られていたという。

現在はないが、本浄寺に伝えられていた「袈裟掛名号」がそれである。

※参考文献『貝地の歴史』笹目倉之助著